

変性子宮筋腫により敗血症性ショックをきたした1症例

深見 達弥¹⁾²⁾ 安達 正武¹⁾²⁾ 窪田 孝明²⁾

¹⁾福岡大学産医学部婦人科学教室

²⁾福岡徳洲会病院産婦人科

要旨：49歳，未妊婦．急性腹症にて当院受診．剣状突起にまで達する変性子宮筋腫の所見を認め，開腹手術となった．開腹所見で，腹腔内は膿汁が充満し，巨大な子宮筋腫を認めた．子宮筋腫後面より膿の排出を認め，排出膿は約4,000mlであった．単純子宮全摘出術（約6Kg）を行った．術後は呼吸・循環管理を含めた全身管理を施行することにより全身状態は徐々に改善したが，腹部腫瘍が横隔膜を慢性的に圧迫していた影響で人工呼吸器からの離脱まで35日間を要した．子宮筋腫は頻繁に遭遇する婦人科疾患ではあるが，子宮筋腫が感染源となりまれに敗血症性ショックをきたし重篤な転帰をとる可能性もある．このような可能性を考慮した積極的な病巣除去や，周術期の慎重な呼吸・循環管理が必要である．

索引用語：子宮筋腫，敗血症性ショック，横隔膜弛緩，全身管理